

アシスト

市川市サッカー協会第4種委員会 委員長 石原孝幸

今年もドイツ遠征に行ってきます

今年も、8月7日から17日の日程で、市川FC（市川トレセン）6年生4名とドイツ遠征に行ってきます。場所は、市川市とパートナーシティを締結しているバイエルン州ローゼンハイム市。ESV Rosenheimというスポーツクラブにお世話になります。今年は、ヨーロッパで発生したテロ等の影響でしょうか。参加希望者が少なく、チームを組んで対戦することは儘なりません。ESV Rosenheim が主催するドイツの子どもたちのトレーニングに加わり、本場のサッカーを満喫してこようと思います。

さてドイツといえば、先日ロシアで行われたコンフェデレーションズカップで、代表歴の少ない若手や中堅で編成された“B チーム”で臨んでいた代表チームが初優勝しました。招集メンバー23人のうち昨夏のユーロ2016代表は7人、4度目の優勝を飾った前回ブラジル大会代表に至っては、なんと3人しか名前を連ねていません。さらに、6月末に行われたU-21ヨーロッパ選手権でも若きドイツ代表が優勝しています。次から次へと若手の成長が著しいドイツの強さはどこにあるのでしょうか。

ドイツのサッカー界は2000年前後で大きく変革しました。ポイントはユーロ2000。グループリーグの最下位で姿を消す惨敗に、ドイツサッカー協会（DFB）のフランツ・ベッケンバウアー副会長（当時）は「このままではドイツは世界のトップから取り残される」と未曾有の危機を訴え、改革に着手します。

具体的には、「育成システム」と「発掘システム」を大改革しました。底辺の拡大を目指した「育成システム」の構築と逸材を見逃さない「発掘システム」です。

今日は、「育成システム」について考えてみたいと思います。

ドイツの伝統的なサッカーは、ゲルマン魂と呼ばれるフィジカルと精神力“だけ”を前面としたサッカーです。ドイツはこのサッカー観から脱却すべく、「サッカーはボールを足で扱うスポーツ」という原点に立ち返り、その当時育成で高い評価を得ていたフランスから「どうすれば技術力・創造力を持った選手を育成することができるのか」を重点的に学びます。そして、目の前の勝利に固執せずに、例えば4種（U-12）年代であればコーディネーション能力のアップと足元の技術習得といったように、それぞれの年代に合ったトレーニング理論を作り出しました。

さらに全国的な指導者のレベルアップを目的にライセンスシステムを再構築し、確立された新しい育成法を浸透させていくためにDFB（ドイツサッカー協会）や地方サッカー協会による“お父さんコーチ”のためのミニ講習会が定期的に行われるようになり、練習も子どもたち全員がもっとアクティブにかかわれる練習メニューや4対4や5対5といった少人数制ミニゲームを推奨するようになりました。

そしてさらに、DFBは、ホームページ上にそれぞれの年代に合ったトレーニングの理論と実践を掲示し、全国の指導者がいつでもどこでも閲覧でき、トレーニングにすぐに生かせるようにしました。これはもちろん日本でも参照することができます。もっとも、すべてドイツ語ですので、何を言っているのかは分かりませんが、図や動画から大よそのことは窺い知ることができます。興味のある方は（DFB→Deutscher Fußball Bund→MEIN FUSSBALL→TRAINER/IN）で探してみてください。

また、ドイツの育成システムについて紹介されている書物としては、「21世紀のサッカー選手育成法 ジュニア編」（大修館書店）、「世界王者ドイツの育成メソッドに学ぶ サッカー年代別トレーニングの教科書」（カンゼン）、「ドイツ流サッカーライセンス講座」（ベースボールマガジン社）があります。この3冊は大変参考になります。

このような変革を成し遂げ、人材の育成を強固にし、強いナショナルチームを作り上げているドイツが、

育成年代の指導者に求めていることはどのようなことでしょうか？

「21世紀のサッカー選手育成法 ジュニア編」(大修館書店)にいくつか掲載されていますので、ここにご紹介します。

■子どもたちのための基本方針

「サッカーを常に自由な「ゲーム」として経験させ、まず好きにさせることから始めるべき」

○クラブでのサッカーを楽しむものにするために

▶子どもたちは押し付けのないサッカーがしたいと思っている。

- ・ 全て自分たちのために、自分のルールに従って
- ・ コーチの大きな影響なしに
- ・ 親からの干渉なしに
- ・ 自分の望むままに
- ・ 自分の能力に応じて
- ・ 小さいグループで

このように行う事で、サッカーが大きな楽しみとなり、生涯を通じてサッカーが好きであり続ける基盤ができて上がる。こうしてこそ、サッカーは子どもたちのための経験となる。

▶子どものゲームを大人のゲームにしてはならない。

▶大人による細かすぎる指示や条件付けの押しつけ、強制は子どものサッカーでは求めるべきではない。

▶コーチは自分の子どもの頃を振り返ってみよう心掛けなくてはならない。コーチは、熱意を持って、手助けの心をもって、何よりも子どもたちが自分自身で自由に行うサッカーを奨励し、オーガナイズする。コーチはそれで、主要な役割をほぼ果たし終えたことになる。

○子どもたちへの接し方

▶アドバイス①

- ・ 子どもたちにあらゆる権利と要求を持つ(一方で義務も負う)一人の人間そして接する。
- ・ したがって、ただ単に保護し世話するだけでは子どもたちのためにならない。
- ・ また、傷つけたり、勝利やチャンピオンシップに極端にこだわって、その方針に従わせたりするべきではない。
- ・ 毎日のつき合いの中で、多くの小さな機会を利用して伝え、理解させるべき。

▶アドバイス②

- ・ 子どもたちにとって、コーチは「サッカーの専門家」としての役割だけでなく、社会的、教育的な役割を担っていと心得るべき。

▶アドバイス③

- ・ プレーヤーとコーチの間のつき合いの基盤は、ポジティブな話し合い。
- ・ 話が一步通行にならないように。コーチからは、いつも指示、説明、命令。プレーヤーは聞くだけという状況は好ましくない。
- ・ プレーヤーが自分の考えや希望、意見、気持ちを表現できるようにすべき。

▶アドバイス④

- ・ コーチは手本となるべき。(親しみのある適切なつき合い方、公平さ、時間厳守、スポーツマンシップ、サッカーへの熱中、相手チームやレフェリーへのフェアな態度等)
- ・ コーチは、ポジティブな人間関係が形成できるよう気を配らなければならない。(親しみのある人間的な温かい愛情、進んで手を差しのべる姿勢、弱いプレーヤーに配慮すること等)
- ・ コーチは、勝利と敗北に対しどのようにポジティブに対応するべきなのかを示さなくてはならない。

どうでしょう。ドイツの指導者が子どもたちとのコミュニケーションを非常に大事にしているのがお判りでしょう。そして、今までこの通信で何度かお話してきた池上 正氏の提唱する「子ども中心の指導」に他ならないこともお判りでしょう。

私は、あのサッカー大国ドイツが、ほぼ同じ育成理念で指導するべきとしていることに驚きと誇りを感じます。市川では多くの方が「子ども中心の指導」を心がけて下さっています。私たちの方向は決して間違っていないと思います。

今だに「なぜ、『子ども中心の指導』でなければならないのか?教え込まなければわからないだろう。」と言う方もいます。「なぜ、『子ども中心の指導』でなければならないのか?」私自身も、自らにいつも問うています。現在の私が一番納得している解答は「『子ども中心の指導』にしないと、子どもの問題解決能力が育たないから」です。サッカーは考え続けるスポーツです。「子ども中心の指導」でなければゲーム中に子どもたちは自らの判断で行動できなくなってしまうと思うのです。

6月から7月にかけて行われた市内の大会のある試合の事を知らせてくれる方が複数名いました。両チームとも、耳障りな、聞くに堪えないベンチワークだったようです。現場に居合わせ同じように感じた方もおいでではないでしょうか。知らせてくれた一人の方は「選手を将棋の駒のように動かして満足している。」と憤慨されていました。

残念なことですが、「指導者が指示を出し続け、できなければ叱咤する指導を続けていると、勝利する確率は増すかもしれませんが、プレーヤーには、自分で考えてプレーすることよりも指導者に叱られないようにプレーすることが身についてしまう」ということに早く気づいて欲しいと思います。そして、サッカー大国ドイツでは遠く時代遅れな指導だということも・・・。

では、子どもたちとドイツに出かけてきます。また今年もドイツでサッカー頭を磨いて来たいと思います。

「委員長通信」へのご意見ご質問は、FAXにて、四種委員会事務局までお願いいたします。 FAX 047-324-3207